令和2･3･4年度研究助成

東アジアの十王信仰及び六道思想に関する図像研究

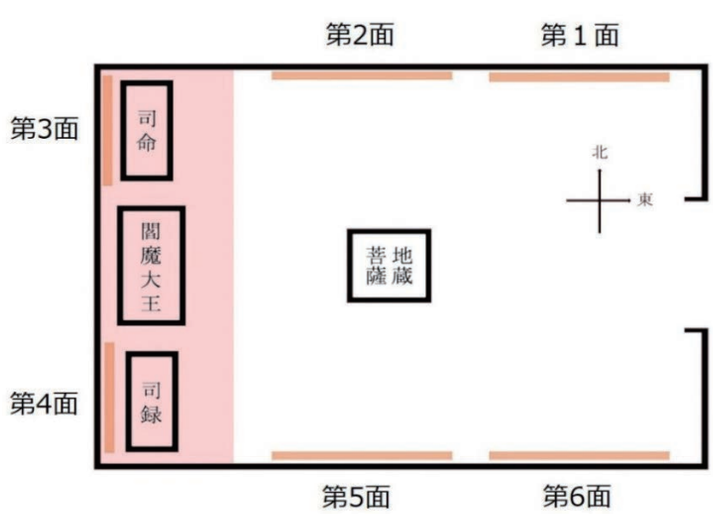
―千本引接寺（ゑんま堂）蔵「十王地獄図」の復元を中心に―

李 東芹（京都市立芸術大学大学院）

1. 研究背景

十王信仰は、地獄へ落ちるのを免れるために、本人あるいは遺族が作善や供養を行うものである。六道は、仏教において、衆生がその業の結果として輪廻転生する天道、人道、阿修羅道、畜生道、餓鬼道、地獄道の６種の世界である。このうち地獄は因果応報の思想に組み込まれた死後の世界であり、現世で犯した悪行への報いを受ける苦しみの場であった。この信仰は中国で遅くとも晩唐までには成立し、宋代には広く流布した。そして、中国に留まらず、朝鮮半島、日本にも伝わっていった。

京都は日本の中で最も長く都が置かれた場所である。仏教の中心地でもあったため、今でも数多くの仏教美術が伝えられている。千本引接寺（ゑんま堂）は、京都市上京区閻魔前町にある。平安時代初期に小野篁が建立した祠が始まりと伝えられ、寛仁元年（1017）に源信の門弟･定覚上人が、「諸人化導引接仏道」の道場として「光明山歓喜院引接寺」の名で開山した。「十王地獄図」は、狩野元信筆と伝えられ、実際の筆者は不詳であるものの、制作時期は室町～桃山時代（16 世紀）と考えられる。内陣２面、外陣４面からなり、外陣の４面板絵の寸法は縦 210cm ×横 210cm、内陣の２面の寸法は縦 210cm ×横 153.5cm の大画面を構成し、現存する地獄板絵としては日本最大とされる［図１～７］。外陣の各面は、経年劣化、剝落、汚損が進んでおり、特に下部の図様の損傷が激しい。一方、内陣の２面は、本堂内の司命・司禄彫像の後ろに設置されていることもあって、保存状態が外陣よりも良好で、目視観察によっても図様が概ね把握できる。

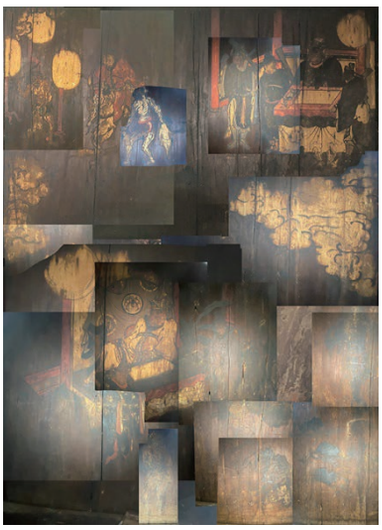


［図１］ ゑんま堂本堂の板絵配置図

［図 2］「十王地獄図」第 1 面 外陣北壁東側

［図 3］「地獄図」第 2 面 外陣北壁面西側

［図 4］「十王地獄図」第 3 面 内陣西壁南側



［図 5］「十王地獄図」第 4 面 内陣西壁北側

［図 6］「十王地獄図」第 5 面 外陣南壁西側

［図 7］「十王地獄図」第 6 面 外陣南壁東側

2. 研究目的

本研究は、京都千本引接寺（ゑんま堂）蔵「十王地獄図」板絵について、東アジアの十王信仰と六道思想についての研究を整理し、光学調査・科学分析等の現地調査を実施するとともに、関連作品及び文献資料の考察を通じて想定復元模写を制作することにより、その思想背景や宗教美術作品としての意義を明らかにすることを目的とする。

本研究は、本図の調査結果と、十王信仰及び六道思想や他の作例を参照し、本図の当初の造形を明らかにして、裁判と地獄の場を現前化したかのような、当初の絵画表現を現代に蘇らせることを目的をする。復元制作を通して、作品の美術史的な位置を明らかにするとともに、中世の十王信仰及び六道思想についての理解を進める。また、同じ絵画材料、同技法により復元を行うことで、実技的な立場から材料と技法について室町～桃山時期の表現を研究し、仏教思想を絵画化する表現及び技法や当時の絵師の豊かな想像力・美意識についての理解も深める。

3. 研究方法

3－1　千本引接寺（ゑんま堂）蔵「十王地獄図」について

本図の概要や文献記録を紹介するとともに、本作の図様の成立背景である、十王地獄図の展開についても紹介する。地獄思想はインドに誕生し、中国で十王信仰が晩唐までには成立し、続く宋代には広く流布した。中国に留まらず、周辺地域にも影響を及ぼしており、朝鮮半島では甘露幀（人間の苦を救い、極楽往生を主題とする施餓鬼法会図）の流行を見た。日本でも特に平安時代には末法思想の広がりとともに地獄の信仰が高まり、鎌倉時代以降、中国の図像も取り入れた十王地獄図が盛んに制作されるようになった。本図は民間にも信仰の広がった室町以降の作例である。

3－2　「十王地獄図」の図様検討及び場面の文献的考察

可視光線及び赤外線による撮影を実施し［図 8、9］、それによって得られた墨線の痕跡から線描図を作成する。これによって、当初の図像を解明し、外陣 4 面と内陣 2 面の連作としての表現と主題の統一性も明らかにする。また、『地蔵菩薩発心因縁十王経』、『正法念処経』、『往生要集』などの経典類との照合によって、本図に描かれた十王審判の場面の順序、地獄における刑罰の場面、仏・菩薩による救済の諸場面が描かれ、場面を区切るように雲が配されていることなどを明らかにする。

３－３　「十王地獄図」の欠損場面の線描による復元

前章の墨線の抽出作業によっても判明し難い部分について考証する。内陣２面の保存状態のよい部分に注目して細部の表現まで読み取った上で、『地蔵十王経』や『観仏三昧海経』、『正法念処経』、『往生要集』等に述べられる十王地獄の記載と、聖衆来迎寺蔵「六道絵」、長岳寺蔵「大地獄図」など主題、画風の類似する作例を参考に、欠損部分はそれぞれに十王が対応する本地仏を補充し、痕跡がある場面の考証を行い、完全に見えない場面は同板絵の他の場面との関係性から失われた図像を想定して、6 面の板絵の線描図を復元する［図 10］。

３－４　「十王地獄図」の彩色の科学調査

「十王地獄図」の色彩の特徴を考察する。彩色材料については、分析を通じて白色は胡粉及び鉛白、赤色は朱、橙色は鉛丹、黄色は黄土、茶色は弁柄、青色は群青、緑色は緑青、金色は金泥を使用していると確認できた。彩色表現については、王の衣、冥官の衣、机と椅子の布、獄卒などは、繰り返し描かれているモチーフであり、これらの彩色にはバリエーションがある。また、地蔵菩薩の服飾には多彩な色と文様が観察された。罪人の肌は、男女を２色の肌色にしている可能性が考えられる。柱、屏風、雲など、色が決まっているように観察された部分は、内陣と同じように塗り、空、山、火焔、刀葉樹、大河、岩石、木材、植物など、重複して描かれていないモチーフは測定箇所から推定できた彩色を使用した。また、内陣では様々な細かな文様の描写が見られるため、復元では色々と文様を描き込んだ。

３－５「十王地獄図」の復元制作

復元できた墨線と彩色の科学調査の結果を踏まえて、まず想定復元 CG 図を制作した［図 11］。内陣の図では様々な細かな文様の描写が見られるため、それも参考とした。その上で、原寸大の紙を用いて肉筆の復元模写の制作を行った。対象の質感表現に留意して墨線を施し、輪郭線に沿って均一に掘塗りをして細部を暈した。毛髪に金泥の線を引き、内陣に見える文様や関連作品を参考にして、十王と獄卒の衣紋、机と椅子の布などの文様を描き入れた。経年劣化により観察できない部分は文様の様式と疎密変化、人物関係と画面のバランスに注意して文様を作った。

本図の筆法は、板絵の描線は抑揚変化を付けて肥痩線を運用し非常に生き生きした運筆で、細部まで人物の顔や筋肉表現などは暢達に描かれ、獄卒の炎髪の金泥線や衣服の金泥、或いは絵具の文様等、制作当時の精度を感じさせる。彩色材料としては、奇異で恐ろしい地獄世界を表現できるように、青、白、赤、緑、黄を中心に大胆な配色がなされていた。獄卒の身体は色鮮やかな朱、緑青、群青、黄土を使用し、服飾には金泥の線を引いて褌と獣皮或いは金色の甲冑を着け、十王と冥官も多彩な布地に細やかな文様が入れられた衣服を着ていた。

［図 8］「十王地獄図」第 1 面　通常光写真

［図 9］「十王地獄図」第 1 面　赤外線写真

［図 10 ］「十王地獄図」第 1 面　線描復元図

［図 11 ］「十王地獄図」第 1 面　CG 想定彩色復元図

4．総括

以上の調査と考察、復元模写の制作を通して、障壁画としての本図の当初の造形を蘇らせ、裁判と地獄の場を現前化したかのような宗教的空間をも再現した。空間構成としては、正方形の画面に具象的な審判や刑罰の場面を描写した。第 1 面の「地獄図」は基本的には遠近法を意識した。すなわち、画面下方が地面方向で近景、上方が遠山、天空方向で遠景という配置になる。その他の 5 面の「十王地獄図」は十王を上下に配置して、その周囲は刑罰あるいは救済の場面が描かれる［図 12］。

死後の世界では、十王がいて裁判官のように裁きを行う。死出の山を越えたら、十王の 1 人が出て来る。1 番目は秦広王で、往生する者も、地獄に落ちる者も、ここから審判が開始される。そして

針の山を越えると、2番目の初江王が出てくる。その王の裁きの前には、衣領樹という木があり、その木の元に奪衣婆という鬼が亡者の服をはぎ取り、衣領樹の枝に掛ける、枝のしなり具合で罪の重さが測られる。この後、三途の川を渡り、賽の河原に連れて行かれる。三途の川を渡ると3番目の宋帝王、4番目の五官王が続く。五官王が持っているのが「業秤」である。一方に重りが付いていて、もう一方に亡者が載せられ、地獄に行くか否かが決まる。その後、5番目に出てくる閻魔王、6番目の変成王の審判、また7番目の泰山王の最終審判を経て、亡者の六道輪廻が決まる。そして8番目は、百ヶ日の平等王、9番目は一周忌の都市王、10番目は三回忌の五道転輪王である。この三人の王は、亡者を救済するために再審判を行う。

地獄主題の作品は仏教の教義に基づいているとはいえ、曼荼羅や一般的な仏像ほど厳密な儀軌や図像が定まっておらず、絵師自身の創造性と美意識をより広く発揮することできる。本論文で考察してきた通り、本図においても、描写内容、構図、技法、彩色材料等全てにおいて工夫がなされていた。戦国乱世の不安定な状況下において、参詣した民衆に地獄への恐怖と浄土への願いを呼び起こさせる描写内容、色彩表現、障壁画としての大画面構成をとり、宗教的絵画空間が達成されていたのである。

このような科学的な手法も用いた宗教美術の復元模写制作は、作品の制作当初の表現に込められた画家の意図を再現するとともに、その成立背景である当時の信仰をも視覚的に表現することができる。それらを継承しつつ現代の美意識をも反映させることで、現代の人々にもかつての信仰への理解を助け、その教えを受け継ぐような本当の意味での宗教絵画を作り続けることにも繋がる。

東アジアでは、十王信仰と六道思想に関する多彩な絵画が生み出され続けてきた。中国の十王信仰は、壁画・石窟などの考古遺物において存在していたことが分かる。しかし、伝承はいつの時代にか衰退し途絶えてしまった。今後は、中国を始め東アジアにおける十王信仰の絵画表現について多角的にアプローチを行いたい。中国と日本の作品の実技的な比較検証も今後の課題である。中国の十王地獄信仰の発祥や変遷を解明することができれば、現代文明では忘れられた十王信仰の内容やその意義が再び理解され、日中両国の文化遺産にも多大な利益をもたらすと考える。

［図 12 ］「十王地獄図」の復元作品